

平成 30 年度 姉妹校等留学プログラム

サレジオ学院 サレジオン・カレッジ短期交換留学

(1) 学校・団体名/種類（派遣高校生的人数）

サレジオ学院中・高等学校/海外研修（2人）

(2) 渡航先

国/都市：オーストラリア/メルボルン

外国の高校：サレジオン・カレッジ

(3) 期間

平成 30 年 7 月 28 日～平成 30 年 8 月 19 日（23 日間）

(4) プログラムの趣旨・目的

カトリックのサレジオ会に属する本校と、同じくサレジオ会に属し、オーストラリアのメルボルンにあるサレジオン・カレッジとの間で語学研修や双方の文化の体験や交流目的に、相互に授業期間に訪問し、それぞれの学校の通常授業と家庭でのホームステイを体験する。

(5) 活動内容

カトリックのサレジオ会に属する本校と、オーストラリアのメルボルンにあり、同じくサレジオ会に属するサレジオン・カレッジとの間で、語学研修や文化交流を目的に授業期間に生徒を派遣し合い、学校の通常授業やホームステイを体験させる。

本年度は、7月28日より8月19日まで同校生徒がオーストラリアへ出向いた。

10月には同じくサレジオ会で、このプログラムを共に実施している他校の生徒と体験・意見交換会を実施した。

(6) 実績・成果

○派遣高校生 TK さん

私は、2018年の夏3週間の間、オーストラリアのメルボルンで過ごした。私は、Iさんというホストブラザーの家にステイしていた。留学期間中は、ホストブラザーの通っている Salesian College という中高一貫校へ通った。そして、学校ではホストブラザーだけではなく、そのほかの生徒についていき様々な授業に参加した。特に、数学や理科などは授業の内容を理解することができて、英語を使って生活していることを実感し感動した。しかし、それと同時に私はそれらの授業のスタイルと日本の授業のスタイルのギャップに驚いた。例えば、化学の授業などでは日本の場合は、個人ごとに決まった席に座り、教員がずっと説明してインプットすることがメインとなっているが、現地校では、生徒が自由に4、5人程でグループを作り、問題を解く際にアクティブラーニングを行

いアウトプットすることがメインとなっていた。また、生徒一人一人が自分用のパソコンを使っており、課題の配布、提出、スケジュール管理などを行っており、システムがデジタル化していたのが印象的だった。

このような日本とオーストラリアとの違いは他にもたくさんあり、そのたびに私は驚かされた。休日などはホストブラザーや彼の友達などとともにメルボルンの市内観光や動物園などに行った。海外で子供だけで外出することは、僕にとってはかなり新鮮でとても良い経験になったと思う。外出した際に、様々な店に行ったのだが、日本人の店員に比べてオーストラリア人の店員は友好的で英語をしゃべる機会となった。特に印象的だったのはホストブラザーと二人でギターショップに行った際に、店員とギターの専門的な話しをできたことだ。僕とホストブラザーはともにギタリストだったこともあってそれなりにもともとギターに関する知識があったので、余計深く理解できた。

このように自分の好きなことを英語という道具を用いて異文化間の交流ができることは素晴らしいことだと思った。英語だけではなく、音楽も人と人をつなぎ合わせるものだと感じた。音楽の時間にはバンドの授業があったのだが、私は軽音部に所属しておりギターとベースなら演奏することができたため、先生が何をおっしゃられていたのかは半分程度しかわからなかったが、授業では様々なことを学ぶことができた。現地校の生徒とともに曲を演奏している際に私は音楽で人はつながることができるのだと実感した。ホストブラザーの家ではよく二人でゲームをしたのだが、ほとんどのゲームが日本産のものだった。現地校でも多くの生徒が日本のゲームやアニメーションの話を持ち掛けてくれた。そのたびに私は日本の技術力や創造性が豊かであるということを実感した。

オーストラリアでの三週間の生活で私は、改めて多くのことを実感し、新たに様々な知識を得ることができた。

○派遣高校生 YOさん

私は、夏休みのこの短期交換留学を経て、自分の中の新しいものの考え方を発見することができた。新しいものの考え方というのは具体的に言い換えると、自分の中で当たり前だと思っていたこと、例えば授業は6時間制でシャープペンシルとノート、それから先生の板書を用いて行うことが、オーストラリアでは当たり前ではなかったのだ。良い例として、授業中生徒は個人個人のタブレット、PCなどのデバイスを用いて、それを中心として授業が進んでいくことなどがある。

また、このような例は他にもいろいろある。その1つが、授業の発言率の高さである。日本では、先生の話聞きながらメモを取る講義型の授業が多い（最近ではディベート型も増えてきた気がする。）が、オーストラリアでは殆どが4～5人のグループになって、その中で意見を出し合い、授業を進めていく型式である。この型式によって、授業は生徒主体で進み、時には意見がぶつかり合い、なかなか先に進まないこともあるが、授業の参加率や、発言率などは日本と比べて非常に多く、コミュニケーション力を上げるにはうってつけだと思う。

課外授業に関しても非常にユニークなものが多い。その中で私の中で特に印象に残っているのは、酪農の授業である。この授業では、広大な敷地を誇る校舎に隣接された学校専用の農場で、牛や馬、ニワトリ、更にはロバなどの家畜の世話をする。初めに農場に足を踏み入れ、ニワトリの世話をしようとした時は、あまりの臭さに気を失いかけた。しかし何度も作業を行ううちに慣れ、非常にやりがいのある仕事だと感じるようになった。これも日本ではあまり味わうことの出来ない貴重な体

験である。

学校の行き帰りにも、日本では感じることの出来ないことがたくさんある。その1つに、私が行った学校の最寄り駅には日本でいうショッピングモールが併設されていて、生徒達はみな朝にそこでパンを買ったり、帰りに寄り道をして何か食べて帰っていた。そのことを学校側も認めていて、日本の学校との違いに驚かされた。

家にも新発見がたくさんあった。その中で特に驚いたことは、言葉で聞けば当たり前のように感じるかもしれないが、やはり、国土の広さというのを身をもって感じた。ホームステイ先の家に着いて、最初に庭を案内された。私は、庭というと、日本にある小さな庭を想像していたが、実際は私の想像していた庭の数十倍大きく、まるで動物園のようであった。庭にはアルパカやニワトリ、犬などが放し飼いにされていて、私の住んでいる町では信じられない光景であった。

このように、留学を通じて学んだことや出会った人などは書ききれない程ある。どれもがまだ鮮明に自分の中に残っているし、この先忘れることもない。私はこの留学に行って本当に良かった。